

## 情報倫理研究の最前線 (4) 情報倫理研究におけるジェンダーの射程

浅井亮子 (あさい りょうこ)  
ウプサラ大学 IT 学部・明治大学ビジネス情報倫理研究所

### 1. はじめに

情報通信技術 (Information and Communication Technology: ICT) は現代社会において必要不可欠なものであり、ICTなくしては私達の日常生活は成り立たない。一方で、ICTを利用するがゆえにかつては予想されなかった新たな社会的問題ないし社会的リスクが引き起こされている。顕著な例としては、監視社会、ソーシャル・エンジニアリングあるいはサイバーセキュリティなどが挙げられよう。これらの問題は互いに複雑に入り組み合い、より大きな社会的問題へと発展してきた。

また ICT が普及し人々のライフスタイルが変化するなかでは、セックスやジェンダーといった性にまつわる事象も ICT からの影響を免れることは難しく、性別に基づくデジタル・デバイドや、サイバーストーキング、ポルノグラフィ、出会い系サイトなど ICT と性との関係性における倫理的問題が議論されるに至る。本稿では、ICT が性に与える影響と、その影響をジェンダーの視角からどのように考察することが可能かについて検討する。

### 2. 情報倫理研究におけるジェンダーの取扱い

1970 年代後半以降、コンピュータの発達とともに科学テクノロジーと倫理との関係性に焦点を当てた研究が活発化し、情報倫理、コンピュータ倫理、インターネット倫理あるいはサイバー倫理などの名称で教育機関や研究機関において研究が行われる領域となった<sup>1)</sup> (Adam, 2005)。とりわけ 1980 年代以降のパーソナルコンピュータの普及とネットワークの発展は、それらを介した社会的事象における倫理的課題に対する関心を高めた (Tavani, 2011)。

しかしながら ICT とジェンダーとの関係性は情報倫理における中心的課題とはならなかった。既

に 1960 年代のアメリカでは不足する労働力を補うため多くの女性がプログラマー、オペレーターあるいはソフトウェアデザイナーとして男性とともに働き、1970 年代にはエンジニアリングや物理学の分野においてプロフェッショナルとして従事する女性も目立つようになった (Misa, 2010)。それでもなお、テクノロジーは男性に属するものとみなされ、女性は従属的あるいは補助的にテクノロジーに携わり、情報倫理研究においても「女性」あるいはジェンダーは周縁的に位置づけられた。その理由について Adam (2005) は以下の四点を指摘する。

- ① 情報倫理がインターネット上の行為における政治的・倫理的関心を始点とするため、政治学あるいは倫理学が持つマスキュリン (男性的) な性質が強く表出した。
- ② こうした政治学や倫理学に対抗するべくフェミニスト倫理学が興隆するも、そのなかからコンピュータやテクノロジーの分野へとアプローチする研究者が数少なかった。
- ③ 1970 年代以降アカデミックな研究における認識論的中立性 (Epistemological Neutrality) の確立が目指され、倫理的中立性についても考慮がなされるなかでテクノロジー分野の研究者は政治的な発言を避けてきた。
- ④ こうした問題を主として取り扱ってきたフェミニズムは、テクノロジーあるいは科学といった領域での発言に臆病であり、文学や社会科学といった他の領域のようにジェンダーの視角からの研究が行われなかった。

しかしながら、1990 年代以降コンピュータあるいはネットワークは男女を問わず人々の生活に必須の要素となり、また教育機関や産業活動においても女性がコンピュータと関わるが増えていく。こうした社会背景のもと「コンピューティングと女性 (Women and/in Computing)」に注目が集まり、ジェ

ンダーの視角から情報倫理における研究が活発に行われはじめる。ただし、女性とテクノロジーあるいはコンピュータを論じる研究の多くは、当該の研究分野や産業における女性の数的な劣位を取り扱うものであった (Lovegrove & Segal, 1991; Lander & Adam, 1997; Adam & Ofori-Amanfo, 2000; Adam, 2000; Adam, 2001; Adam, 2005; Balsamo, 2011; Tavani, 2011)。典型的な例としては、デジタル・ジェンダー・デバインドが挙げられよう。

「なぜ女性のテクノロジーへのアクセスが活発化しないのか」については、デジタル・デバインド問題を起点としながら、教育の問題、労働環境の問題、ソフトウェアのデザインの問題、ゲームやコンピュータの利用を通じたジェンダー・バイアス強化の問題、伝統的な性役割に基づく社会規範の影響など、さまざまな視点からその原因が検討されてきた (Green & Adam ed., 2001; Tavani, 2011)。一方で2000年代後半以降、先進諸国を中心として、インターネット利用における性別による格差はほぼ解消されつつある<sup>2)</sup>。さらに現在ではソーシャルメディアの利用においては女性の方がより積極的であるとの調査結果から、従来とは異なるソーシャルメディア利用におけるジェンダー・デバインドも指摘されている (Nielsen, 2012; Garber, 2012)。それでは、デジタル・デバインドが解消されるなかで、ジェンダーの視点は情報倫理研究においてどのような役割を果たすのであろうか。

### 3. 情報社会における権力構造を捉える視点

情報社会の進展において、科学技術政策や科学技術産業が社会に与える影響はよりいっそう大きくなっている。ジェンダーの視点は、こうした政策の決定過程や企業の意思決定過程における権力構造を捉える一視点を提示する。さらに、ICTが個々のライフスタイルに深く浸透し、人々の生活を形作るなかでは、ICTを介した新たな人間関係と行動様式が形成される。こうした個々のライフスタイルがICTによってどのように変化しているのか、とりわけ性に関わるオンライン上での事象を中心として、その変化とそこでの権力構造を、社会的規範や社会的価値の考察も含めて、ジェンダーの視点から検討することが可能である。技術社会においてその

人口の半数を占めるはずの「女性」の声が反映されないという「女性の問題 ‘women’s issues’」としてのみ捉える狭隘な視点ではなく、男性も含めたすべての人に関わる問題として捉える視点をジェンダーは提示する (Adam & Ofori-Amanfo, 2000)。すなわち、情報社会における男性と女性の数的な格差がある状況とその原因を分析するだけでなく、社会規範や価値は社会がデザインされる過程でどのように機能しているのか、また規範や価値は社会的にいかにも再生産あるいは新規に生成されるのかをジェンダーを通して捉えることが可能となる。

デジタル・ジェンダー・デバインドに代表される性別に基づく数的な格差は、可視的あるいは観察可能な現象である。こうした格差に対して積極的是正措置 (affirmative action) によって男性と女性の比率を均等にす政策も多く見受けられる。しかしながら、そこにはいくつかの疑問が生じる。まず「質と量」についての議論が活発化することは想像に難くない。また社会による個人々への「社会的ニーズの押しつけ」によって個々のライフスタイルの柔軟性が制限される可能性も考えられる<sup>3)</sup>。さらに性的マイノリティ (ゲイ、レズビアンやトランスジェンダー等) に対する社会的配慮も必要とされる。すなわち、ジェンダー平等の名の下に新たな権力構造と不平等な関係性が生成される懸念がある。

こうした懸念は、ジェンダーが社会科学における基礎概念として広く用いられる一方で、その意味解釈の統一化が十分に図られていないことに起因する。ジェンダーは男性/女性という生物学な性別と密接に関わるものの、性別そのものとは異なる。ましてや「ジェンダー=女性」を意味するものではない。『岩波女性学事典』によれば、ジェンダーは「社会的性役割や身体把握など文化によってつくられた性差」であり、人々の間の関係性に非対称性を引き起こす階層秩序を表す (井上他, 2002; 163)。一方で「性別」と「性差」との曖昧な認識が、ジェンダーを生物学的な性別 (セックス) と同様に男性と女性とに分けてしまうという混乱を招いた<sup>4)</sup>。ジェンダーはセックスと密接に絡み合いながらも、「男らしさ」あるいは「女らしさ」の文化的ないし社会的な状態を表す<sup>5)</sup>。すなわち、ジェンダーは人と人との差異およびその度合いを捉える概念であり、ジェンダーに基づけば人は男性と女性との二区分に

隔絶されるものではなく「性差」という連続性における距離として位置づけられる(浅井, 2007)。

こうしたジェンダーの視点は、「質と量」の問題がジェンダーではなく、セックスの視点から引き起こされ、ジェンダーを男性と女性とに二分したために従来の性役割に基づく生活を志向することがライフスタイルの選択肢として許容されづらい現状を浮き彫りにする。また男性的・女性的とも区分することが難しい性的マイノリティへの理解に有用となる。さらに、性やそれに関わる行為が多様性をみせる現代社会では、セックスが必ずしも可視化されていないため、ジェンダーの視点がより重要となる。

#### 4. むすびにかえて

ジェンダーは他の身体的な違いとどのように異なるのであろうか。それは体重や身長の違いとは異なり、人々の行動を規定する規範や価値に大きな影響を与える。身長が高いあるいは低いために社会的に制限されるライフスタイルは想像しづらい。さらにオンライン上では多くの差異が不可視化され人は匿名性を帯びるため、ジェンダーがオンライン上でのコミュニケーション行為に与える影響は大きいと考えられる。姿の見えない相手と適切なコミュニケーションをはかる上では、「男らしい」表現や「女らしい」話題などジェンダーはコミュニケーションを構成するための重要な要素となる。そこでは「男らしい」表現をしたり、「女らしい」話題を扱ったりする者が、必ずしも「男」であり「女」である必要はない。セックスや身体的特徴が不可視化され匿名性を帯びるオンライン上での行為は、ジェンダーの意味とそれが人々の生活のなかで果たす役割をより一層際立たせる。

現在、多義化し多用される「ジェンダー」概念を、社会科学を中心とする幅広い学問領域において再確認する動きがみられる(Wharton, 2005; 2012; Bradley, 2007; 2013; Evans & Williams, 2013)。情報倫理研究においてジェンダーの視角を用いることは、こうしたジェンダーの再定義にも貢献しうる。またデジタル・デバイドを本稿で提示したジェンダーの視点から考察することは、男女比の是正の問題を超えて、その格差の原因の解明、実際に必要とされ有効と考えられる教育を含めた社会的対応や

政策の提案、また情報社会において選択可能なライフスタイルの提示などを可能にする。生物の基本的特徴であるセックスは変更が難しい一方、生命と社会の存続には必要不可欠である。また、ICTがジェンダーを包含しながら普及し活用されるとき、ICTは人々のセックスに対する意識に影響を与えうる。二次元のゲームキャラクターとの交信を嗜好し他者との社会生活を拒絶する、あるいはオンライン上でアルゴリズムが画面上に表示した多数の相手のなかから交際相手や結婚相手を選択するなど、ICTを介したセックスにまつわる新たな事象においても、ジェンダーは有効な分析視角として期待される。

#### 注

- 1) 本稿においては、ICTを媒介とした情報における倫理的課題を中心として扱うことから「情報倫理」を統一して使用する。情報倫理、コンピュータ倫理、インターネット倫理あるいはサイバー倫理など名称は異なるものの、「ICTsに関係する倫理的課題を中心として形成された領域」であることは共通している(Adam, 2005: 4)。コンピュータ倫理はよりプロフェッショナルあるいはコンピュータ産業を注視し、インターネット倫理はインターネットに関わる事象に焦点を当てる傾向にある。一方でより包括的にコンピュータやネットワークに関わる倫理的問題を取り扱えることから「サイバー倫理」が位置づけられている。これらの名称の違いとそれら研究視点の違いについてはTavani(2011)を参照されたい。
- 2) この傾向について、とりわけ発展途上国においては依然としてデジタル・デバイドが顕著にみられ、またその格差はジェンダーだけにとどまらず所得格差、社会階層や教育レベルなどと複雑に絡み合い根深い問題となっているとの指摘もある(Quibria et al., 2003; Brännström, 2012; Hilbert, 2011)。また西欧諸国では、ジェンダーに基づくデジタル・デバイドは解消されつつある一方で、社会的属性に起因する新たなデジタル・デバイドが引き起こされている(Brandtzaeg et al., 2011)。
- 3) 典型的な例としては、'House Wife 2.0'にみられる女性の専業主婦回帰の現象に対する社会的反応が挙げられよう。
- 4) 本稿においては、身体的・生物学的な性別を「セックス」と表記する。
- 5) 「ジェンダー」の語は14世紀には既に用いられていた。また、言語における「男性・女性・中性」

の区分を表す文法用語としてだけでなく、「男らしさ」あるいは「女らしさ」の文化的ないし社会的な状態 (the state of being male or female) を表す用法もあった。しかしながら、後者の意味が一般的に用いられるようになったのは 20 世紀半ば以降である (Oxford Dictionaries Language Matters, 2014)。

## 参考文献

- [ 1 ] Adam, A., "Gender and Computer Ethics," *Computer and Society*, December 2000, Vol. 30(4), pp. 17–24.
- [ 2 ] Adam, A., "Computer Ethics in a Different Voice," *Information and Organization*, Vol. 11, 2001, pp. 235–261.
- [ 3 ] Adam, A., *Gender, Ethics and Information Technology*, Palgrave MacMillan, Hampshire, 2005.
- [ 4 ] Adam, A. & Ofori-Amanfo, J., "Does Gender Matter in Computer Ethics," *Ethics and Information Technology*, 2000, Vol. 1(2), pp. 37–47.
- [ 5 ] 浅井亮子「「性差」の政治経済学的研究：多層的連続帯の上への写像としての性差概念」, 明治大学博士学位請求論文, 2007.
- [ 6 ] Balsamo, A., *Designing Culture*, Duke University Press, Durham, 2011.
- [ 7 ] Bradley, H., *Gender*, Polity Press, Cambridge, 2007.
- [ 8 ] Bradley, H., *Gender*, Second Edition, Polity Press, Cambridge, 2013.
- [ 9 ] Brandtzæg, P. B. et al., "Understanding the New Digital Divide—A Typology of Internet Users in Europe," *International Journal of Human-Computer Studies*, Vol. 69, 2011, pp. 123–138.
- [10] Brännström, I., "Gender and Digital Divide 2000–2008 in Two Low-income Economies in Sub-Saharan Africa: Kenya and Somalia in Official Statistics," *Government Information Quarterly*, Vol. 29, 2012, pp. 60–67.
- [11] Evans, M. & Williams, C. H., *Gender: The Key Concept*, Routledge, New York, 2013.
- [12] Garber, M., "The Digital (Gender) Divide: Women are More Likely Than Men to Have a Blog (and a Facebook Profile)," in *The Atlantic*, available online: <http://www.theatlantic.com/technology/archive/2012/04/the-digital-gender-divide-women-are-more-likely-than-men-to-have-a-blog-and-a-facebook-profile/256466>, 2012 (10/7/2014).
- [13] Green, E. & Adam, A. ed., *Virtual Gender: Technology, Consumption and Identity*, Routledge, London, 2001.
- [14] Hilbert, M., "Digital Gender Divide or Technologically Empowered Women in Developing Countries? A Typical Case of Lies, Damned Lies, and Statistics," *Women's Studies International Forum*, Vol. 34, 2011, pp. 479–489.
- [15] 井上輝子他編『岩波女性学事典』, 岩波書店, 2002.
- [16] Lander, R. & Adam, A. ed., *Women in Computing*, Intellect Books, Exeter, 1997.
- [17] Lovegrove, G. & Segal, B. ed., *Women into Computing: Selected Papers, 1988–1990*, Springer-Verlag, London, 1991.
- [18] Misa, T. J., *Gender Codes: Why Women are Leaving Computing*, IEEE Computer Society, Wiley, New Jersey, 2010.
- [19] Nielsen, *State of the Media Spring 2012 Advertising & Audience*, by Nielsen Company, available online: <http://www.nielsen.com/content/dam/corporate/us/en/reports-downloads/2012-Reports/nielsen-advertising-audiences-report-spring-2012.pdf>, 2012 (10/07/2014).
- [20] Oxford Dictionaries Language Matters, English, Oxford University Press, 2014, available online: <http://www.oxforddictionaries.com> (10/07/2014).
- [21] Quibriaa, M. G. et al., "Digital Divide: Determinants and Policies with Special Reference to Asia," *Journal of Asian Economics*, Vol. 13, 2003, pp. 811–825.
- [22] Tavani, H., *Ethics and Technology: Controversies, Questions, and Strategies for Ethical Computing*, Third Edition, John Wiley & Sons, Hoboken, 2011.
- [23] Wharton, A., *The Sociology of Gender: An Introduction to Theory and Research*, Blackwell Publishing, Oxford, 2005.
- [24] Wharton, A., *The Sociology of Gender: An Introduction to Theory and Research*, Second Edition, John Wiley & Sons, Sussex, 2012.

## 略歴

### 浅井 亮子 (あさい りょうこ)

明治大学ビジネス情報倫理研究所研究員。2011年より  
ウブサラ大学 IT 学部で客員研究員として ICT と人間・  
社会に関する研究に従事。博士 (政治学)。